

特集 Turgot 没後 200 年(1781-1981)

テュルゴ『考察』の新ドイツ訳刊行に接して

坂 田 太 郎

テュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727-1781) の没後 200 年を記念して、クチンスキー夫人の手になるその著『考察』(*Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*) の新ドイツ訳が昨年刊行された。Turgot, A. R. J.: *Betrachtungen über die Bildung und Verteilung der Reichtümer, nach der von Turgot freigegebenen Ausgabe* (par M. Y., Paris 17-70) übersetzt und mit einer Vorbemerkung und pertinenten Materialien versehen von Marguerite Kuczynski, in: *Oekonomische Studientexte*, Bd. 7, Berlin, 1981.

ケネー『経済表』第3版の発見者として知られる夫人は、1965年にはその原文対照ドイツ訳を、1972年にはミーク教授の協力を得てその原文対照英訳を公刊してきたが、さらにその前年1971年にはケネーの前期(1756~1759)の諸論稿の、1976年にはその後期(1763~1767)の諸論稿のドイツ訳を世に問うた。いずれも学界に対しての大きな寄与であった。テュルゴ『考察』の今次のドイツ訳刊行は、夫人の不撓の重農主義研究の線上にある注目すべき1つの成果と見らるべきものであろう。

ところで100ページに垂んとする解説のかんりの部分が原典ならびにフランス語、ドイツ訳諸版の考証に充てられているが、われわれの多くが最も興味を惹かれるのはおそらくこの部分であろう。周知のようにこの『考察』の原典には、その当初以来厄介な問題がつきまとっている。その経過を簡単に辿って見るとこうである。その草案は帰国する中国からの留学生2人に、テュルゴが与えた覚書であり、帰国後中国の経済的・社会的諸事情を報告するに当たっての問題の所在を示したものである。その作製は1766年のこととなっているが、この草稿がデュボン・ド・ヌムールの懇請により、1769年から1770年にかけて当時彼の編集していた重農学派的機関誌 *Ephémérides du Citoyen* に連載された。が、連載に当たってデュボンの手による改竄が行われたというのが問題の起りである。(もっともこの改竄に当たっては、デュボンにも彼なりの理由があった。しかしそのことについては今は触れない。後掲のシュルの一文がその点については参

考になる。)このことは当然テュルゴの憤激を買ったが、その結果1770年にテュルゴの希望による訂正稿が別刷(tirage à part)として世に出、それは1788年に再刷された。(この再刷本は一橋大学附属図書館所蔵「メンガー文庫」に収められている。)

もともとテュルゴとデュボンとは親密な間柄にあり、特にデュボンのテュルゴに対する敬愛の情は深かった。(彼はテュルゴ伝を書いている。Dupont de Nemours, *Mémoires sur la vie et les ouvrages de M. Turgot, ministre d'Etat*, Philadelphie, 1782)にもかかわらずテュルゴの死後デュボンが編集刊行した『テュルゴ全集』(Turgot, *Œuvres complètes, précédées et accompagnées de mémoires et des notes sur sa vie, son administration et ses ouvrages*, par Dupont de Nemours, 9 vols., Paris, 1808-1811)に収録した『考察』はだいたいの自らの改竄テキストに拠っており、またこの全集に拠って19世紀中葉刊行され広く流布したデール・デュサール編の『著作集』(*Œuvres de Turgot*, Nouvelle édition classée par ordre de matières avec des notes de Dupont de Nemours, augmentée de lettres inédites, par MM. Eugène Daire et Hippolyte Dussard, 2 vols., Paris, 1844)も、ほぼこの改竄テキストを採用した。(マルクスをもバーム・バヴエルクをもふくめて19世紀のテュルゴ研究は、その殆どがデール・デュサール版に拠っている。)

この慣行に対して不満を表明したのがジャン・パティスト・セーの孫レオン・セーであり、こうした不満が学界の問題となった結果19世紀の末葉テュルゴ自身の希望による1770年別刷をほぼ復元したのがロビノーである(L. Robineau, *Turgot, administration et œuvres économiques*, Petite Bibliothèque Economique Française et Etrangère, Paris, 1889)。この復元にはその前年「なぜ『考察』が正確に知られていないのか」という一文(Schelle, G., "Pourquoi les "Réflexions" de Turgot ne sont-elles pas exactement connues?" *Journal des économistes*, tome 43 (juillet à septembre 1888), Paris, 1888)を草したシュルが参画したらしいの

であるが、1913年から1923年にかけて刊行されたシュール編集の『テュルゴ全集』全5巻(*Euvres de Turgot et documents le concernant, avec biographie et notes par Gustave Schelle, 5 vols., Paris, 1913-1923*)に収録された『考察』も、当然のことながら同じ別刷を底本とした。今日定本とされているのはだいたいにおいて1770年刊別刷を復元したロビノー版、シュール版のテキストである。その後の刊本は皆その例に倣っている。*Turgot, textes choisis* et préface par P. Vigreux, Collection des Grands Economistes, Paris, 1947. *Turgot, écrits économiques*, préface de B. Cazes, Perspectives de l'Economique, Paris, 1970. 永田, 津田両教授の邦訳も同様である。永田清訳注, チュルゴ『富に関する省察』岩波文庫, 1934年。津田内匠訳『チュルゴ経済学著作集』一橋大学経済研究双書12, 1962年。

だが問題がそれで片づいたわけではないのである。というのは『考察』には1775年刊のドイツにおける重農主義者モーヴィロンの手になるドイツ訳があり、この書をめぐって前世紀から疑義が燻っているからである。Untersuchung über die Natur und den Ursprung der Reichthümer und ihrer Vertheilung unter den verschiedenen Gliedern der bürgerlichen Gesellschaft, aus dem Französischen übersetzt von Jakob Mauvillon, Lemgo, 1775。(この訳書も一橋大学附属図書館所蔵の「メンガー文庫」に収められている。)この訳書については既に前世紀の終りフェイルボーゲンが触れているが(Feilbogen, Siegmund: Smith und Turgot, ein Beitrag zur Geschichte und Theorie der Nationalökonomie, Wien, 1892), 原著者の名が匿されているばかりでなく、表題が奇異だし、それに編別が1770年刊本ともまたエフェメリド版とも違っている点が問題の焦点である。わが国でこのドイツ訳の所在を最初にとりあげたのはおそらく山田雄三教授であろうが(テュルゴ『省察』のドイツ語訳本(1775年)について、『久保田明光教授還暦記念論文集』1957年), 筆者もその頃一橋大学に赴任してきて親しくこの文献に接することができた。

ところでこの訳書の序文にはこういう記述がある——著者と親しい私の知人の1人がこの原稿をドイツにもちこみ、親切にもそれを私に伝えてくれた。私の翻訳はこの草稿(Handschrift)からである——。(この序文はその前の献辞と同じくほぼ1774年8月頃の執筆と見ることができるところがこうした経緯と関連のありそうなテュルゴ書簡が残されているのである。彼がその側近カ

ヤールに宛てた1774年5月5日付けの手紙に言う——『富の形成』(*Formation des richesses*)の翻訳を計画している人のあるのは光栄だし、また大へん嬉しい。ところで翻訳に当っては、作品の一部即ち「利子付貸付についての覚書」(*Mémoires sur l'usure*)と重複する部分の必要な削除をお願いしたい。私はデュボン氏にそのことを要求したのだったが、彼は印刷3ページ分を減らすことに同意しなかった。削除を要する部分は75節117ページである。(シュールの付注によるとこれは別刷のページ数であるが、この別刷そのものは見ることはできない。)その節を全部削除し、その後の諸節の番号を[順繰りに]変えればよい。ここでの神学の論議は、それが対象とした人びとにとっては適わしいのだが、構想の糸を中断することになるからである。もし訳者がこの節を存置したいと思うなら、75節を削除した上で、74節の終りに参照符をつけ、75節を脚注の形で収録すればよい。印刷にはかなり誤植(*fautes d'impression*)がある。訳出の前にその訂正を配慮して欲しい。また訳者が序文で[1]この作品が公刊を目的として書かれたものでないこと、[2]それが2人の中国人に宛てたシナの経済制度にかんする質問に答えるための一般的知識を彼らに与えようとする簡単な覚書にすぎないこと、ならびに[3]この覚書が著者から曾つてエフェメリドの編者デュボンに托され、それがこの機関誌に発表されたものだといふききにつに触れること、には異存がない——と。(Lettre à Caillard. XXIII (Paris, 5 mai, 1774), *Euvres de Turgot*, éditées par G. Schelle, tome 3., pp. 675 et suiv.)

モーヴィロンの序文を見ると、テュルゴの指示する3項がはっきり記述されているし、また彼が原著者を匿名としたのは、がんらいこの作品が公刊を目的としたものでないということに彼なりに尊重しての措置だったのかも知れないと思うのである。(エフェメリドにも匿名(M. Y.)で発表された。)

つぎに問題となるのは、書簡中にある75節即ち神学に関する論議を削除して欲しいというテュルゴの指示である。75節117ページというのは上述のように1770年刊別刷のそれであるとする、1788年刊の再刷本にもまたエフェメリド版にもあてはまらないことになるが、じつと筆者の手許にある再刷本の75節は「利率はあらゆる商品の価格と同じく取引の相場によってのみ決めらるべきである」という標題をもち、エフェメリド版の場合も同様である。ところが再刷本では66節が重複しているのでその誤りを正すとすると、75節は76節となる。そしてテュルゴが指摘する「利子付貸付にかんする

覚書」中の神学の論議に当る部分というのは、実は、再刷本における74節のことなのであり、編次の誤りを訂正すると、75節になる。この節は「反対論に対する回答」(Réponse à une objection)という標題をもつが、ロビノー版もシェル版もそれに倣う諸版本も、テュルゴの意を汲んでこの節を削除している。ただロビノー版は上掲書簡中のテュルゴの配慮にしたがって、この節を前の節(訂正74節)の終りに付注として挿入していることに注意したい。この点は問題とするモーヴィロン版のドイツ訳における取り扱いと関連するかに見えるからである。

ところで筆者は1770年刊の別刷そのものは見る事ができないのだが、もし再刷本が別刷の誤りをそのまま再現していると見ることが許されるなら(クチンスキー夫人の考証によると別刷と再刷との違いは、再刷に正誤表がないことと僅かだが表現のちょっとした違いがあるだけだという。現在世界に3部しか残存していないという別刷を点検しての夫人の証言である)、テュルゴが書簡に75節と指定したのは、著者なりに編次の誤謬を正して書簡に伝えたのではないかと考えられよう。して見るとカヤールの手を経てモーヴィロンに渡った原典というのは、この別刷かあるいはそれに近い草稿だったという推定が成り立ちそうである。(じじつカヤール宛て1770年3月16日付書簡でテュルゴはカヤールに草稿の返却をもとめ、デュボンに印刷物(別刷)一部をその代りに送らせると言っている。)モーヴィロンがエフェメリド版を参照したということはあっても、それを底本としたという感触は生じない。いま巨細にその点を挙証するスペースはないが、それが別刷(すなわち再刷)と離れてエフェメリド版と語句・表現の上で符合するのは、決して点検に自信があるわけではないが、4箇所ぐらいしか無いのではないか。

ただここで1つ気になるのは、テュルゴがデュボンに要求した削除に後者が同意しなかったという書簡中の記述である。手許にあるエフェメリド版では、この節が完全に削除されているからである。筆者の私蔵するのは1969年ミラノ刊の復刻本(Ephémérides du Citoyen, ou Bibliothèque Raisonnée des Sciences Morales et Politiques. Feltrinelli Reprint en Collaboration avec l'Institut Giangiaco­mo Feltrinelli, Milan, 1969)であるが、テュルゴの文句がウソでないとする、この問題はエフェメリドには幾つもの異版があったというコールマン氏の研究に解決のいとぐちをもとめるより他に、今のところ筆者にも目途が立たない。(先年同氏から贈られた次の論文には教えられるところが多い。

Earle E. Coleman, "Ephémérides du Citoyen, 1767-1772," *Papers of the Bibliographical Society of America*, Vol. 56, 1. Quarter, 1962.)しかしエフェメリド版では75節が削除されているという証言がミーク(後出)をはじめ若干あることも付言しておきたい。

筆者は上にモーヴィロン版のドイツ訳には著者が匿名となっていることの他に、編成に問題があるということに触れた。しかし今ここでその編成を立ち入って吟味することはできない。ここでは上に触れた75節の削除の問題を手がかりとして、そこから編成のありようを窺うということにとどめておきたい。ところで上掲のテュルゴ書簡中に問題の74節(訂正75節)を訳者が存置したいと思うなら、それを付注として前の節の終りに添付したらよいという指示があったが、この訳者はこの指示に従う。ただその際特徴的なのは、73節、74節が当然意味の上から訂正75節に関連するものと解して、その3節をその前の節(別刷・再刷では訂正72節、モーヴィロン版では70節)の付注として収録するのである。ロビノーは訂正75節だけをそのような形で処理したのだったが、モーヴィロンはかなり大胆な処理をしたことになる。彼の解釈が正しかったかどうかはともかくとして("Mutuum date nihil inde sperantes" (何も報償を期待することなく貸し与えよ)という福音書の教義は73, 75両節の問題であるところから、エフェメリド版はこの両節を削除した。モーヴィロン版の処置はその中間の74節も脈絡上この両節と関連すると解したためであろうが、そのことはこの3節の内容を見ればそれほど奇矯とは言えないかも知れない)、彼はこうした流儀で実は別刷・再刷の編次を、彼なりにかなり大胆に分節し併合しているのである。このいきさつは上に引用した山田論文にも示唆されていた。この大胆さともう1つ標題を省略していること(この点についても1769年12月2日付デュボン宛てテュルゴ書簡に、欄外に本文の概要を記入したが、それを標題とするかしないかはあなたに任せるという文句がある)とは、たしかに問題となるが、しかしその内容にかんする限りでは、エフェメリド版、デュボン『全集』版、デール版よりも、はるかに原典に近かったという解釈も許されるのではないであろうか。

ところがクチンスキー夫人は、このモーヴィロン訳に対してかなりの不信をぶつける。だいたい『考察』のドイツ訳は1775年のモーヴィロン訳をはじめとして、従来4種類出ており(Turgot: Betrachtungen über die Bildung und die Verteilung des Reichtums, ins Deutsche übersetzt von V. Dorn, in: Sammlung

sozialwissenschaftlicher Meister, I. Bd., 1. Hälfte, Physiokratische Schriften 1, 3. Aufl., Jena, 1924. Id.: Betrachtungen usw., hrg. von August Skalweit, in: Sozialökonomische Texte, Heft 3, Frankfurt am Mein, 1946. Turgot, Leben und Bedeutung des Finanzministers Ludwigs XVI, unter Abdruck seiner noch heute wichtigen Schriften, Biographie, Würdigung und Textwahl von Walter Weddingen, in: Klassiker der Wissenschaften, Monographien mit ausgewählten Texten, Wirtschaftswissenschaft, Bd. 1, Bamberg, 1950) クチンスキー夫人訳は5番目に当る。筆者はスカルヴァイト版は見ることができなかったが、ドルン訳もヴェッティンゲン版も底本はロビノー・シェル版である。ロビノー・シェルの線がドイツ訳においても実を結んだということが出来る。ところがクチンスキー夫人の訳はさらにこの線を突きぬけて原点に、すなわち1770年の別刷に立ち戻ろうとしている姿勢を示していることが大きな特色だと言えるであろう。

もっとも前述のように、ロビノー版・シェル版も原点即ち1770年刊の別刷に立ち戻れることを標識としていた。が、しかしその姿勢は厳密に貫かれていない。いずれの版も、例えば70節はエフェメリド版に従っているといった工合である。これに対して夫人は別刷の厳密な復活を志す。その呼吸は例えばテュルゴ書簡の指示にもかかわらず、別刷(再刷)にある75節を復活するという点に端的にあらわれていよう。しかしこうした方針は、先年のミークの『考察』英訳においてもはっきり出ていた。Meek, Ronald, "Reflections on the Formation and the Distribution of Wealth," *Turgot on Progress, Sociology and Economics* (Cambridge Studies in the History and Theory of Politics), Cambridge, 1973. だがミークの場合には1770年の別刷でなく、それを参照しつつも1788年の再刷を底本としたところに特徴がある。それならばなぜ彼は再刷を底本としたのか。彼の挙げている理由はこうである。たしかに再刷にも誤植はあるが、しかしそこでは別刷の誤植や綴り・句読の誤りや文法上の間違い等が訂正されており、別刷以後に手の加えられた原草稿の最終版と見られるからだと言うにある。

それはともかく夫人は1770年の別刷を典拠としながら、それ以後のフランスにおける諸版およびドイツ訳の諸版を綿密に点検しているのであるが(特に用語・訳語ならびに表現の適不適の詮索は本目が細かい)、とりわけ最初のドイツ訳モーヴィロン訳の訳業に対して下す評価

が印象的なのである。夫人はモーヴィロン版のドイツ語が、現在から見ればやや堅すぎはするが誤訳の個所などはまずないことを認めながらも、かなり胡散臭いという眼で見ている点に注意をひく。大胆なというよりもかなり乱暴なと思われるも仕方ない分節・併合や標題の抹殺は、責められても仕方ないかも知れないが、夫人が不信を懐く理由の主なもの次のような点である。デュボン宛て1770年2月2日付け書簡では、テュルゴの手許に草稿は一部しかないらしく、それをデュボンに渡す際もその返却に念を押している。それ程大事な草稿をやすやすと他人から他人に伝えた等とは考えられない、と夫人は見る。のみならず上に引用した1774年5月の書簡で彼が訳者に指示したページ数は別刷のそれであり、しかも彼は誤植(fautes d'impression, Druckfehler)に注意して欲しいと言っているのも草稿の誤記(Schreibfehler)のことを言っているのではない。それなのにモーヴィロンは序文で、底本としたのは著者からカヤールを通じて伝えられた草稿(Handschrift)だと言っていたりすること、がこれである。たしかに1770年2月の段階では未だ別刷が出来ていなかったのも、テュルゴが草稿を大切にしたのは当然であるが、1774年5月書簡の段階では別刷は既に出来ており、多分その一部がカヤールの手を通じてモーヴィロンに渡ったのであろう。それを彼が「草稿」と言っているのは胡散臭いと言えばそれまでだが、しかしさして隔意なく解釈すれば、既に別刷の印行から4年も経過しており別刷の部数も僅かだったとすれば(テュルゴ書簡に100部ないし150部という数字が出ているが、それは印行前の希望部数であって実際にはかなり少数部数だったのではないか。現在の残存部数が僅か3部だということから推しても)それを書写したものだったかも知れないし、またはそれに近い草稿だったのかも知れない。ともあれ彼の訳業に接して見れば、エフェメリド版を参照しながらも、この別刷またはそれに近い草稿を底本としたものであることにおそらく間違いないものと言えるのではないであろうか。

筆者はこのモーヴィロン訳についてもう1つ問題にるのはその訳書の表題であると思う。それは *Untersuchung über die Natur und den Ursprung der Reichthümer und ihrer Vertheilung unter den verschiedenen Gliedern der bürgerlichen Gesellschaft* となっている。山田教授も触れたように、この表題はテュルゴ『考察』よりもむしろアダム・スミスの主著『国富論』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776)に近い。この点の詮索に

はいろいろの人によってとり挙げられたテュルゴ・スミスの関係が絡んでくるのであるが、このことはべつにクチンスキー夫人が表立って取り挙げている問題でもないのでここでは触れることをしない。ただこの問題を取りあげた文献の1つが『考察』の最初の英訳書(訳者匿名 *Reflections on the Formation and Distribution of Wealth, by Mr. Turgot, Controller General of the Finances of France, 1793*)に使用された底本の問題とからめて、モーヴィロンンのドイツ訳も別刷とは違った別個の草稿に拠ったのではないかとの推定を下しているようであるが、筆者は目下のところの推定には同調しがたい(Cf. Lundberg, I. C., *Turgot's Unknown Translator*, The Hague, 1964)。

ところで残されたスペースでこの訳書の他の特徴の委細に亘ることは不可能であるが、第1に目につく点はフィジオクラシーとの関係、特にケネーの構想ないし論点とテュルゴのそれとのかかわり合いとずれとの闡明であろう。その点われわれの解釈からそれ程距離のある見解が示されているというわけではないが、だいたいにおいてテュルゴをケネーとスミスとの中間的地位に立つもの、あるいは古典派的思考の道を均したという意味での位置づけを行っているということができよう。もちろんそうした解釈は大きくマルクスの観点に裏うちされているが、しかしデール版に拠ったマルクスのテュルゴ研究に染め直しの手が加えられている点もあつたりする。ここには附録Ⅲとしてマルクスがデール版によって『考察』の抄録をした際手を加えた箇所が収録されているが、マルクスがテュルゴをいかに読んだかあるいは読

もうとしたかを知る手がかりが与えられて興味を誘う。また夫人のテュルゴ解釈には、夫君ユルゲンのそれとの交叉があると見ることもできそうである(Kuczynski, J.: *Zur Geschichte der bürgerlichen Politischen Oekonomie*, Berlin DDR, 1960)。

しかしそうした点と併せてテュルゴの理論・思想を全体としてつかむ用意が示されていることも見逃しえない。例えばコンデイヤクとの関係などに問題が残るとしても初期のすぐれた言語学研究('Remarques critiques sur les Réflexions philosophiques (de Maupertuis) sur l'origine des langues et la signification des mots,' 1750. 'Etymologie,' 1756)や同じく初期の進歩史観を孕む普遍史の構想('Tableau philosophique des progrès successifs de l'esprit humain,' 1750. 'Plan de deux discours sur l'histoire universelle,' vers 1751), ならびに後期の地方制度にかんする腹案(Mémoire sur les municipalités, 1775)等を噛み合せてのテュルゴ像の顯出に努力が注がれる。この点ではミックからうけた刺激がありありと窺われるように思うのである。各種の研究文献にも一応注意が払われ、津田教授の貴重な発掘業績や渡辺恭彦教授の探査にも目が及んでいる。ただ研究業績という点で例えばベーム・バヴェルクやシュンペーター等のそれに一言の言及もないことに物足りなさを感じる向きがあるであろう。最後に附録Ⅰとして『考察』の機縁となったところのテュルゴが2人の中国留学生に与えた質問の抜萃、附録Ⅱとしてテュルゴ書簡の抜萃が添付されていることを言い添えておきたい。

(亜細亜大学経済学部)